

創造 トークス

2023.10.8 (日)

に

「高齢者と表現」を考えた

超老芸術は「文化」だ！

～超高齢化社会における文化芸術の可能性～



ARTS COUNCIL SHIZUOKA



創造 トークス

はじめに

アーツカウンシルしずおかは、社会の様々な分野において創造的な取り組みが展開される未来を見据え、アート
の関与を推進していますが、各分野にはすでに現場ならではの状況把握を元にした魅力的な取り組みが存在します。
そして、それらの背景には、一步踏み込まないと見えない分野ごとの課題や視点や知見の集積があります。そうし
た集積に触れ、アートとの接点を探るために、多分野の事柄をテーマとしたセミナーシリーズ「創造トークス」を開
催しました。

セミナーでは、テーマに関わる分野の専門家から現状や背景などをお聞きすると共に、アートの観点も持ちなが
ら取組を実践しているゲストが登壇し、視点を変えることによって新たなアプローチを見出している事例の紹介もして
いただいています。

「創造トークス」は、各分野で活躍される方々の創造性がより活性化され、新たな発想がひらかれるきっかけとな
ることを狙いとしていますが、同時に、その分野に普段関わっていない方々にとっても、社会の動向について新たな
知見を得る学びの機会となれば幸いです。

セミナー 3 ページ

考察 13 ページ

セミナー 超老芸術は「文化」だ！ ～超高齢化社会における文化芸術の可能性～



社会でのアートを活用した取り組みの促進につなげるため、アーツカウンシルしずおかは社会の様々な要素とアートの関係を探るトークシリーズを実施しています。第1回目は、同時期に開催していた展覧会「超老芸術展」の関連企画として高齢者の表現をテーマに行いました。

「超老芸術展」に出展された作品は、それまで「芸術」とは無縁だった方々がある時を境に突如として制作を始め、猛烈な熱意をもってそれを続ける市井の高齢者たちによるものでした。それらは、見方を変えれば特異な行動と見なされてしまうことかもしれません。一方、私たちは社会生活を送る上で、周囲を気にしすぎるあまり「表現する」ことを閉ざしてしまうこともあり、その抑圧が苦しさにつながってしまう場合もあります。そう考えると、私たちには「表現する」ことが当たり前のこととして根本に備わっていると言えるのかもしれません。そして、自由に表現が行われることによって、幸福度が高められ、他者とのコミュニケーション意欲が生まれたり、いきいきとした人生を送ることにつながったりしていく、そんな可能性がひらかれるのかもしれません。

このトークでは、高齢者自身による作品制作のみならず、人にとって表現することの意義や、それを見つける人や鑑賞者とのつながり、そこから発生するコミュニティなどにも話が及びました。生活や暮らしを中心に据えて高齢者の表現を捉えた時に、どのような可能性が見えてくるのでしょうか。

セミナー 超老芸術は「文化」だ！ ～超高齢化社会における文化芸術の可能性～

概要

[日時] 2023 年 10 月 8 日(日) 13:30 ～ 15:00

[会場] 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ映像ホール (静岡市駿河区東静岡 2-3-1)

[来場者数] 63 名

[主催] アーツカウンシルしずおか

登壇者



福住 廉

Fukuzumi Ren

美術評論家、
秋田公立美術大学大学院准教授

1975 年生まれ。著書に『今日の限界芸術』(BankART1929、2008 年) ほか。「共同通信」で毎月展評を連載しているほか、展覧会の企画も手がける。現在、秋田公立美術大学大学院准教授、東京藝術大学大学院絵画研究科油画専攻テクニカル・インストラクター。



photo by 成田舞

上田 假奈代

Ueda Kanayo

詩人、詩業家、
堺アーツカウンシル
プログラム・ディレクター

1969 年吉野生まれ。3 歳より詩作、17 歳から朗読をはじめ。2001 年「ことばを人生の味方に、詩業家宣言」。2003 年、大阪・新世界で喫茶店のふりをしたアート NPO「ココルーム」を立ち上げ、釜ヶ崎に移転し、2012 年「釜ヶ崎芸術大学」開講。2016 年ゲストハウスのふりもはじめ、釜ヶ崎のおじさんたちとの井戸掘りなど、あの手この手で地域との協働をはかる。



photo by Ballena Studio

エドワード・M・ゴメズ

Edward M. Gomez

美術評論家、キュレーター

雑誌『brutjournal』の創刊者兼編集長であり、スイス・ローザンヌにあるアール・ブリュット・コレクションの諮問委員会メンバーを務めている。イギリスのアウトサイダー・アート専門雑誌『Raw Vision』の編集に携わり、同誌をはじめ、『New York Times』や『Afterall』、日本経済新聞社の英字雑誌『Nikkei Asia』など多くのメディアでの執筆を続けている。

進行

櫛野 展正 Kushino Nobumasa

アーツカウンシルしずおかチーフプログラム・ディレクター

櫛野 セミナー「超老芸術は『文化』だ！—超高齢化社会における文化芸術の可能性—」を開催いたします。私は進行役を務めます、アーツカウンシルしずおかチーフ・プログラムディレクターの櫛野と申します。

アーツカウンシルしずおかでは、高齢になってから、または高齢になっても、なお独自の芸術表現を続けている方たちの表現を「超老芸術」と名付け、これまで取材を続けてきました。現在、超老芸術展も開催しておりますが、本日はこの超老芸術をはじめ、高齢者の芸術表現について考える機会にしたいと思います。それでは、ご登壇いただくゲストのみなさまをご紹介します。

まず、美術評論家の福住廉さんです。福住さんは、秋田公立美術大学大学院で准教授を務められています。高齢者の芸術表現にも深い関心をお持ちで、2015年には※「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」において、「今日（こんにち）の限界芸術百選」と題した企画展も開催されました。

続いて、美術評論家やキュレーターなど多彩な顔を持つエドワード・M・ゴメズさんです。ゴメズさんは、**アール・ブリュット**やアウトサイダー・アートなどをはじめとする、さまざまな美術表現を取り上げ、展覧会や雑誌など多くのメディアで紹介を続けられています。

最後に、詩人、詩業家で、堺アーツカウンシルプログラム・ディレクターでもある上田假奈代さんです。上田さんは、2003年にNPO法人こえとことばとこころの部屋、通称ココルームを立ち上げ、2012年からは、大阪市西成区の釜ヶ崎で、誰でも参加でき学び合うことができる市民大学である「釜ヶ崎芸術大学」を開催されるなど、社会

と表現の関わりを続けられています。超老芸術展の exhibitor の一人、堀江日出男さんの表現にも深く関わられています。それでは、さっそくゲストのみなさまから自己紹介をお願いします。

「限界芸術」：暮らしを中心に芸術を考える

福住 はじめまして。全国各地の展覧会に出かけ、美術についての文章を書く美術批評という仕事をしています。同時に、展覧会の企画や美術批評の書き方を教えるレクチャーもしています。

研究のテーマは、鶴見俊輔さんが提唱した「限界芸術」です。鶴見さんが限界芸術を提起したのは1956年でしたが、現代社会ではどういうものが限界芸術にあたるのかということを、もう20年ぐらい考えています。理論的な研究だけではなく、展覧会という形で問いかける実践もやっています。

鶴見さんは、芸術には「純粋芸術」と「大衆芸術」と「限界芸術」の3種類があると言いました。「純粋芸術」は、専門的な芸術家が専門的な鑑賞者に向かって発信して受け取られる美術だと言います。2つ目の「大衆芸術」も同じように専門家がつくるのですが、それを受け取るのが専門家だけに限られません。映画や小説のように、お金さえ払えば、必ずしも専門的な知識を持っていなくても楽しめるような芸術を指しています。

ここまでは多くの研究者が述べたことですが、鶴見さんがユニークだったのは3つ目として「限界芸術」を挙げたところです。限界芸術とは、非専門家が発信して、非専門家が受け取るもの。ピカソの絵画を鑑賞するにはキュビ

ズムを理解していないといけないといったように、純粋芸術はやたらハードルが高いのですが、もっと誰もが楽しめるし、誰もが表現できる芸術を鶴見さんは限界芸術と言ったのです。

限界芸術は非専門家のものなので、芸術にもなりえるし生活にもなりえます。だから、純粋芸術が頭の中にインストールされている方からすると、限界芸術のどこが芸術なのか、なかなか理解しにくい。しかし、鶴見さんは芸術を中心に考えてはいませんでした。あくまでもそれぞれの暮らしが真ん中であって、その外側に芸術があると考え

※「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」……新潟県十日町市および津南町で開催される世界最大規模の国際芸術祭。2000年の第1回から原則3年に1回開催し、これまでに8回開催されている。日本中で開催されている地域芸術祭のパイオニア。

※キュレーション……美術館や博物館などの文化施設などで、展示物の収集、管理、展示を担当する専門家。また「キュレーション」とは、情報を選択し、整理し、特定の目的や視点に基づいて再構成する行為を指す。元々は美術館や博物館でのキュレーターの業務から発生した言葉だが、インターネット上の情報を扱うデジタルキュレーションという概念も含まれるようになった。

※アール・ブリュット……1945年にフランスの芸術家ジャン・デュビュッフェが提唱した芸術概念で、既存の美術の影響を受けていない人たちによる独学自習の表現のことを指す。

※アウトサイダー・アート……アール・ブリュットを英語に言い替えるものとして、1972年にイギリスの美術評論家ロジャー・カーディナル(Roger Cardinal, 1940-2019)が著作の中で生み出した造語で、精神障害のある作者によるものだけでなく、民俗芸術や独学による表現全般も指すようになり、美術界の主流の外側で制作する人々の作品にまで概念を拡げた。

※限界芸術……「限界芸術論」, 鶴見俊輔, ちくま学芸文庫, 1999

たわけです。

図●が鶴見さんの考えた限界芸術を山に見立てたイメージです。限界芸出は僕らが生活している麓に近いところにあります。水がいっぱいあって、作物が育つようなところですが、頂上に近づくほど森林限界を超えて、だんだん生活から離れていくわけですね。そのトップにあるのが純粋芸術で、それらを集めたのが美術館ということになります。純粋芸術は生活から非常に遠いところにあり、限界芸術の周りには生活があると、芸術の見方を逆転したのが鶴見さんのおもしろいところです。



65 歳以上限定の展覧会

福住 2015 年に「今日の限界芸術百選」という大規模な展覧会を、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の中で開催しました。今日は、その 2 年前に同じ会場で開催した「おきなおうな 越後妻有シルバーアート 2013」という展覧会についてお話をします。

この展覧会は、65 歳未満は出品不可という展覧会でし

た。65 歳以上であれば、誰でもどんな作品でも展示しますと呼びかけ、新潟県を中心に約 50 人のおじいちゃん、おばあちゃんたちの作品を一挙に展示しました。おもしろかったのは、65 歳以上という枠を設定しただけで、通常は棲み分けられている作品や人が一堂に会したことでした。

民芸品や工芸品だけではなく。1 枚の紙から細かく鶴を折った連鶴がある一方で、前衛美術グループの GUN のメンバーによる現代美術の作品があったり、その隣には農家の屋根を描いた団体展に所属している方の絵があったりしました。

たとえば、90 歳を超えて、老人ホームに入居されてから突如としてドローイングを毎日描き始めた軸原一男さん。孫が X (旧 Twitter) で発信して、それで広く世に知られるようになったのですが、「今日の限界芸術百選」に参加される前にお亡くなりになってしまいました。描く喜びや描く肯定感が素直に伝わってくるようなエネルギーな絵です。

また、郵便局員だった高橋八十八さんは、配達に訪れる先々で各家庭に残っている民話を聞き取っていました。しかも、それらの話を全部手書きでノートにまとめている。在野の民俗学者ですね。

権兵衛さんはタクシー会社の社長さんでしたが、とにかくカラオケが大好きで、展覧会でも熱唱してくれました。ご自宅に伺った時も、歌う際には隣の部屋に一旦消え、ちゃんとジャケットに着替えて出てきて、レーザーディスクを神妙にセットして歌うんです。まるで儀式のように神妙な雰囲気でした。

鶴見さんは、アナンダ・クームラズワミ (Ananda Coomaraswamy) の“アーティストは非常に優れた特別な才能の持ち主では

ない。それぞれの人間がそれぞれの特別な才能に恵まれたアーティストなんだ”という言葉を超老芸術の中で引用していますが、この言葉はまさに「超老芸術」や「シルバーアート」に該当するように思います。

一人ひとりがどういふ芸術を大切にするのか

福住 最後になりますが、鶴見さんは「漫画の戦後思想」という論文でも、このクームラズワミによる“芸術家という特殊な人間がいるのではなくて、それぞれの個人が特殊の芸術家だ”という言葉引用しています。“この規準から言えば、ラファエロも、ルーベンスも、らくがきをする小学生も、おなじかという反問が出てくる”のですが、“評者みずからの生きている場所から、自分の価値規準をたてて、ある種の遠近法をつくって過去を集約することは、できる。らくがきをする小学生のほうが、ルーベンスよりも偉大に見えるという遠近法 (価値規準に基づく遠近法) をたてることは、あり得る。人の生きているところには、それぞれの人にそのような特有の遠近法がある。ある状況の中である要求をかかげて生きている主体をぬきにして、芸術についての一般評価をすることは無理なように私には思える”とあります。

つまり、芸術の世界の中で通用している基準に沿ったり、天才的な価値に従ったりして、芸術性を評価するのではなく、個々人にはそれぞれに特有の価値基準があるのだから、それぞれの遠近法に沿って芸術を楽しめばいいんだということです。これは、じつはとてもラディカルで過激なことを言っているんですね。近代芸術の普遍性とか世界共通の遠近法をまるごと否定しているわけですか

ら。今回の「超老芸術」も、いわゆる美術史の文脈とか専門的な技術に依存することなく、それぞれの遠近法で世界をとらえていることがよくわかる。限界芸術にも通底する超老芸術の過激なところに大いに共感しました。

櫛野 それでは、続いてエドワード・M・ゴメズさんお願いします。

アール・ブリュットのアーティストたち

ゴメズ 私は長い間、アール・ブリュットやアウトサイダー・アートにとっても興味を持っており、このテーマにフォーカスしてきました。芸術作品を見ていると、「芸術をつくる必要性とは何か？」そして「人間が芸術をつくる能力の源はどこにあるのか、どこにこの能力が関係しているだろうか？」という2つのことを考えさせられます。私は常にこの問いの答えを探しています。

1940年代にフランスの美術家ジャン・デュビュッフェはヨーロッパを旅して、アール・ブリュットのアーティストの作品を発見し、友人のアンドレ・ブルトンらと共にコレクションを蒐(あつ)め始めました。

約50年前、デュビュッフェのコレクションはスイスのローザンヌ市に寄贈され、アール・ブリュット・コレクションという専門の美術館が設立されました。その時のコレクションは約5,000点でしたが、現在では約70,000点が収蔵されるまでになりました。私はこの美術館でキュレーターとして展覧会を企画することもあるので、今日はいろいろなアール・ブリュットのアーティストを紹介したいと思います。

スイスのローザンヌ市で生まれたアロイズ・コルバス

(Aloise Corbaz)は、学校を卒業後、ドイツのポツダムに移住し皇太子の家庭教師になりました。その時に皇帝とのロマンティックな関係を夢想し始めました。戦後に彼女はスイスへ帰り、作品をつくるようになりました。彼女の作品はドイツの皇帝との想像上の関係をテーマにしています。

そして、スイスのアドルフ・ヴェルフリ(Adolf Wölfli)も、アロイズと同じように重要なアール・ブリュットのアーティストとして知られています。彼はスイスのベルン郊外で生まれました。教育はほとんど受けませんでしたが、彼は地方によって変化する方言であるスイスドイツ語の書き方を独自で発明し、それを使って、神さまのように宇宙をつくる話など様々な物語を挿絵入りで残しました。現存する彼の作品は全部で、25,000ページ、45冊にもなります。敬虔なキリスト教徒だったブラジルのアルトゥール・ビスポ・ド・ロザリオ(Arthur Bispo do Rosário)は、ある夜、作品をつくって神に対して世界の提示をしなければならぬというキリストの啓示を受けました。以来、古い布や段ボール、紙などのいろいろな材料を使って珍しい作品をつ



くりました。

東京在住の土井宏之は、元々有名なホテルのレストランのシェフでしたが、実弟が亡くなったことをきっかけに、小さな丸の絵を描き始めました。彼の作品はニューヨーク、ロンドン、パリ等で展示され、日本では2013年に初めて紹介されました。彼の作品は現代美術のアートフェアにも参加しています。

横浜で「帽子おじさん」として知られる宮間英次郎は、100円ショップの小さいおもちゃや布や紙を使って、ユニークな帽子や衣服をつくり、自らそれらを身に付けて街中を練り歩いていた。

「私は存在する」という宣言

ゴメズ 昔から人間は自分の表現を追い求めています。これは、美術史家である私にとって大きなテーマです。私は「どうして人間は表現をするのか？」を研究してきましたが、人間は表現行為を通じて「私は存在する」という宣言をするのだと考えています。この宣言をすることは、人間が生きていくうえで根源的に必要なことだと思います。先史時代の洞窟壁画から、今回の超老芸術展で展示されている作品まで、芸術的な作品をつくって、表現する欲求は永遠に続くでしょう。それでは作品をつくりましょう。

櫛野 それでは最後に上田假奈代さん、お願いします。

「寄せ場」のおじさんたちとの活動

上田 大阪からまいりました上田假奈代といいます。超老芸術展、ほんとにおもしろいですね。その出展者の中で、私は堀江日出男さんと付き合いがあって、今回展示させて

もらい本当にうれしいです。私の活動と、なぜ堀江さんに会ったかについてお話をさせてください。

私は詩人です。フランス語の辞書で「詩人」と調べると「役立たず」って書いてあるらしいんです。役立たずなりに20年ばかり、大阪の西成・通称釜ヶ崎で喫茶店のふりをして、まちを大学に見立てる釜ヶ崎芸術大学、そして外国語も話せないのにゲストハウスを運営しています。

日本が高度経済成長する時に、道や建物を造るために労働者がたくさん集められ寄せ場が全国につくられましたが、釜ヶ崎は日本で一番大きい寄せ場でした。でもバブル崩壊以降は仕事がなくなり、路上に押し出され、そしてそこで少し歳を取り、現在では生活保護を受ける方がたくさん暮らす街です。

野宿の方が増え、そして生活保護を受けられる方が多くなりかけた2003年に、喫茶店のふりから始めました。おじさんたちと一緒に何か活動したいなと思っていたのですが、お化け屋敷と言われて怪しまれていたもので、店先でバザーをしたり、毎月一回無料の保健室をやってみたりして関わりをつくっていきました。ともかく人の関係がおもしろいので、関係の循環が起こるような場所づくりを目指しています。

堀江日出男さん

上田 おじさんたちの高齢化がますます進んで、暮らしのそばに出かけて行こうと考えたのが「釜ヶ崎芸術大学」です。年間80から100ぐらいの講座を開催しています。これを2012年から始めたら、西成区が65歳以上の単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業を

2013年から始めました。私たちも参画して、事業拠点になっている「ひと花センター」（人生でもうひと花咲かせようセンター）に、2年ほど前から堀江さんが通うようになりました。

堀江さんはひと花センターの一面を陣取って毎日絵を描くようになり、作品を壁に貼っていました。堀江さんは毎日何枚も描いて、画用紙もどんどんなくなっていくから、1枚10円で買ってもらうことになりました。そうしたら元々お酒にしかお金を使わなかった堀江さんなのに、画用紙を買うようになったんですね。作品にはモノクロとカラーがあるんですが、それは単に色鉛筆がなくなってモノクロになったということなんです。私は彼にもっと描いてほしいと思ったので画材の寄付を募りました。この会場の中にも送ってくださった方がいらっやいます。全国からたくさん送っていただき、堀江さんの絵に色彩が戻りました。

釜ヶ崎芸術大学：天文学から死ぬ勉強まで

上田 釜ヶ崎芸術大学の活動はいろいろな引っ掛かりをつくろうということで、天文学、哲学、芸術、詩、音楽、地理等、多彩な講座を開催しています。基本的には、みんなでつくることを大事にしていって、体を動かしたり、おしゃべりしたり、自由にのびのびとしています。また、わたしたちスタッフの関心ごとである「働くこと」を考える講座をしたりもしています。1期生のほとんどが天国に卒業しちゃったこともあり、お坊さんと呼んで死ぬ勉強もします。

そんな中で、おじさんたちの一番の十八番（おはこ）は土木だと思い立って、ゲストハウスの庭に井戸掘りをすることにしました。おじさんたちが押し入れからヘルメット持っ

て来てくれて、よぼよぼなのにスコップ持ったら腰が入って、めちゃくちゃ活躍してくれました。小さい子どもや外国人など、のべ700人ぐらいで井戸を掘ってしまったんです。

その時にこの図のことを思いました。ホームレス支援や福祉の世界でよく使われているものでマズローの法則といえます。一番下に衣食住といった生理的欲求があり、安全が確保された上で自己承認の段階があり、最後は自己実現に至るというモデルです。しかし、こうした段階的な考え方ではホームレス生活からなかなか脱却できないということで、ジグソーモデルというものを提唱されていたんです。ドーナツ形の円の中心に本人がいて、本人の周囲にジグソーパズルの様々なピースが揃うことが必要だというものです。衣食住も大事だけれども、その中に居場



所や表現しあう場所も同時にあることが大事と言っているモデルです。

課題解決とかちゃうねん！って言いたくなる

上田 最近、世の中では課題発見、課題解決という言葉が大流行りです。だから釜ヶ崎に外から来た人はウハウハ

しています。課題だらけなので。そして、すごうれしうにいっぱい課題を言うんですけど、言われてたらだんだん腹立ってくるんですね。「課題解決とかちゃうねん！」って言いたくなるんです。たしかに困ってることもあるのだけど、でも「どうせだったらおもしろいところ見てよ。おもしろいところに注目しましょう」って言うようにしています。

おじさんたちは、周縁化された人たち、社会的弱者、マイノリティーと言われてしまうわけですが、でもその人たちが心を落ち着けて、正直に表現してくれると、めちゃくちゃおもしろい。したたかだし、ユニークだし。私自身もその表現にずっと励まされてきました。だから、「問題や課題だらけの支援される存在、社会的に弱い人という括りに閉じ込めんといてほしいわ!」と本当に思っています。

そのためには、どういう場だったらいいか、どういうことが必要かと、みんなで一緒に耕しながら、安心していられる「いくつもの居場所」が必要ですね。それからやっぱり「出番」。達成感もあれば、何かの役に立ってうれしいとか、喜んでもらってうれしいとか、そんな出番があるといいですね。そして、「ゆるやかなつながり」。いっぱい依存先があるほうがいいですね。細くても、緩やかでも、いろいろなつながりがあることが大事だなと思っています。

高齢者の表現に注目する理由

櫛野 ここからはフリートークになりますが、みなさんに質問を投げ掛けたいと思います。まず、福住さんにお聞きますが、なぜ高齢者の表現に注目されているのか、もう少し教えていただけますか。

福住 直接的には2つ理由があって、一つは現代美術の世界で「新人」と「若手作家」がイコールにされる風潮に対して批評的なアンチテーゼを打ち出したいということ。「シルバーアート」には、新人作家は必ずしも若手に限らず、年を取ってからの新人作家もあり得るのだというメッセージを込めました。

もう一つは、鶴見さんのいう「個体発生的な限界芸術」をアップデートしたいという点。鶴見さんは、子どもの時はみんな限界芸術家だと言っているんですが、僕はそれを受けて、人は亡くなる前にもう一回、限界芸術家になるのではないかという仮説を立てました。どんなに偉大な彫刻家でも、やがて筋肉も衰えて、手先しか動かせなくなった時、それでも何かを創り出すことができるとすれば、それは限界芸術なのではないか。この仮説を実証したいんです。

櫛野 超老芸術展の感想も簡単に教えていただけませんか。

福住 とはいえ、やっぱりガタロさんはすごいですよね。もう圧倒的、圧巻の一言でした。絵も言葉もほんとうにすばらしい。限界芸術とか言ってるけれども、必ずしもすべての非専門家による表現が優れているわけではないし、それらを判定する批評が必要ないわけではないと思います。いい限界芸術もあるし、だめな限界芸術もある。それは、純粋芸術であれ大衆芸術であれ、まったく変わりありません。そうすると、限界芸術を突き詰めると、何が純粋芸術で何が限界芸術なのか、わからなくなってくるところがおもしろい。だってガタロさんの作品は誰が見たって美術館が所蔵して未来に残すべき作品じゃないですか。限界芸術や超老芸術は、純粋芸術からは例外、周縁と言

われがちなんだけれど、でもその周縁や例外を批評的にとことん見ていくと、メビウスの輪みたいにくるってひっくり返って、中心に折り返される瞬間がある。ガタロさんの作品を見て、そういう限界芸術の不思議なクリティカル・ポイントを見たような気がしました。



人生経験と深く結びついた作品に美を見つける

櫛野 続いてゴメズさんに質問です。アウトサイダー・アートや、アール・ブリュットのアーティストは第三者によって発見されることが多いと思います。ゴメズさんは多くのアーティストを見てこられていますが、取り上げる時の何か判断基準はお持ちですか。

ゴメズ 私はアメリカ等いろいろな国に行ってアーティストのアトリエやギャラリーに行きます。また、美術館やギャラリーで、すでに他界したアーティストの作品を発見して、研究する機会があります。そこでは美的に質の高い作品を探します。ジャン・デュビュッフエの定義を参照しながら、こう自問します。「そのアーティストの表現にオリジナリティ

があるか」、それから「アーティストは社会や文化とどのような関係を持っているか」。

私たちは子どもの時から社会や文化と関係を持って生きています。アール・ブリュットのアーティストも同じくそれらの影響を受けますが、彼らはそこからさらに自らの文化を発明するとデュビュッフェは説明しました。そして自らの文化を作品として表現しています。私はこの社会や文化の関わりと、アーティスト独自の文化を比較して理解しようと思ひながら、作品を見ています。

また、デュビュッフェは、アール・ブリュットやアウトサイダー・アートの作品は、アーティストの個人的なビジョンを深く表現しなければならないとも言います。アール・ブリュットの作品は、一般によく知られている美術史と関係がありません。それぞれのアール・ブリュットの作品は、アーティスト個人との結びつきが強く、彼ら彼女ら固有の美術的分野になります。

超老芸術展では、とてもユニークなオリジナルの作品を見ることができました。例えば、美術史家・評論家としてガタロさんの作品を見ると、よく知られているモダン



アートの作品を連想します。でもガタロさんの人生の話はとてもユニークで、彼の作品はこの豊かな人生経験から生み出されたことがよくわかります。私は、そのようなユニークな作品をいつも探しています。

批評家が秘密のものをさしているわけではない

上田 私も釜ヶ崎で日々いろいろな人の表現に出会いますが、ゴメズさんのお話を伺っていて、個人的に忘れられない出来事を思い出していました。

随分前に絵日記をみんなで書くということをしていた時に、そこにやってきたおじさんが、始めはだいぶ嫌がっていたのだけど、さらさらっと消えそうな人影を2つ描いてくれました。絵日記なのでどこかへ行った時のことが書いてあって、作品として見たら弱いんですね。でも、美術史や芸術の質ではなく、そういう人生があることを忘れられないんです。私とその人との関係や時間という非常に個人的なものがあって、18、9年も前で、たくさん話したわけでもないのに、強く残っているんですね。

福住 それすごい分かります。キュレーションの批評ともかぶりますが、僕も「福住さんはどういう基準で評価しているんですか」とよく聞かれます。でも、僕が何か秘密の物差しを持っていて判断しているわけではないのです。今、上田さんがおっしゃったように、個人と個人の関係の中で出会った作品について書くしかないわけです。それで事後的に批評的な基準みたいなものが出てくるのです。それもさっき言った鶴見さんの「個体発生的な限界芸術」と全く同じ話で、一人一人の中にそういう芸術や批評みたいなものがあって、それらが出会うことによっ

て、展覧会や批評といった別の動きになるということだと思っています。

櫛野 福住さんとゴメズさんに聞きたいのですが、今回の超老芸術展もそうですが、作品の背景に強くある作家さんの人生の存在も含めて作品として捉えているということはあるですか。

福住 あると思うし、今回はそれぞれの作家さんの人生も含めて引き出したメディエーターとして櫛野さんがいるということの意味がやっぱりすごく大きいと思います。櫛野さんが引き出さないと、こういう形では見えないと思います。

ゴメズ 作品を見る時に二つの観点があります。一つ目は、誰がどうしてこの作品をつくったのか、どんな目的があったか、アーティストの興味や影響を受けた物事は何か、というナラティブに関係するアプローチです。もう一つのアプローチはもっと科学的です。こちらは、人生の話に特に関心を向けません。もっと技術的な問いかけをします。例えば、どういうふう材料を使ったか、作品制作時のアーティストの経済的な状態はどうだったか等です。どちらもとても大切で、美術史家は両方のアプローチを持って作品を研究します。

表現すると応答してもらいやすくなる

櫛野 上田さんのお話は、現場でのコミュニティづくりの実践に即したもので、「耕す」「居場所づくり」「出番」「つながりづくり」といった言葉にもそれが現れていました。今回の超老芸術展でも特徴的だったのが、会期中、出展作家の方が自主的に在廊されていて、毎日のように自分の作品についてお客さんに話されていたことでした。そ

ここで自身が主役になっていて、「出番」「居場所」「つながりづくり」になっていく様子があり、その場限りかもしれませんが「コミュニティ」を感じる雰囲気がありましたし、ゴメズさんが言われた「私は存在する」という宣言があるように感じました。上田さんは、現場でおじさんたちと一緒に活動される上で、なぜアートというアプローチを使っているのでしょうか。

上田 先程、福住さんが「死ぬ前に限界芸術家になる」とおっしゃっていましたが、まさに表現するっていうのは、死ぬ前に人生をくつきりさせるのだと思います。それって、その人にとっても意味があるし、受け取る側にとっても意味がある感じがします。でも表してもらわないことにはやっぱり分からない、伝わってこないということが根本的にあります。表現をすると、誰かがそれを受け止めて、応答してもらいやすくなる。応答があると、またいろいろなことが生み出されていくし、深まっていきますよね。

櫛野 超老芸術展をやっているけど、やはり「芸術」というのはハードルが高いのかなという印象を持っています。釜ヶ崎芸術大学は日常の現場に近いところに表現の場が用意されている状態だと思いますが、参加される方々から表現することに対して抵抗はありますか。

上田 みなさん、活躍の場は欲しいと思っているのかなという気がしています。釜ヶ崎芸術大学には参加しないけど、釜ヶ崎芸術大学のチラシを折ったり、封筒貼ったりといった手伝いで関わってくれたりする人もいますし、最初は恥ずかしがって「できない」と言っていた人が、いつも会場に来てくれて、あるタイミングで背中を押され、バツと表現が溢れ出てくることもあります。私はみなさんの表現が見



たいので、とにかく声をかけ続けることにしています。

櫛野 光が当たった方々のその後的心境の変化などは見られますか。

上田 堀江さんにも激しくそうした様子がありましたね。「ひと花センター」が年末年始で閉まった時に、また酒浸りの生活に戻り、正月明けたらぼろぼろになっていて、絵を描きたいんだけどもう座ってられないぐらい体力が落ちてしまったことがありました。だけど、ちょうど展覧会のDMの版下が上がってきたので、それを堀江さんに「もうすぐ展覧会だよ」と見せたら持ち直したんですよ。そしてその後、展覧会で作品が展示されているのを見た彼はさらにテンションが上がって、滅多に自分から話しかけることなんてないのに、ひと花センターで会う人に「見たか、見たか」と話しかけて、スターになっていました。

見たい気持ちが引き起こされる

ゴメズ 今日の話には、一つの大切な言葉がありました。表現と、つながり・コミュニティ。この二つの言葉の間にはおもしろい関係があります。アーティストの表現にはオーディエンスが必要です。このアーティストとオーディエンス

という関係が徐々にコミュニティをつくっていきます。

福住 「シルバーアート」は65歳にならないと出品できないのですが、65歳未満のおじいちゃんが、自分がコレクションしている蜂を漬けた焼酎の瓶を勝手に展覧会の会場に置いて帰ったことがありました。おそらく、彼の知っている地域のおじいちゃんおばあちゃんたちの作品を目の当たりにして、「俺もこういうの持ってるから見てもらいたい」という欲望に火がつけられたということだったように思います。さっき櫛野さんから、今回の超老芸術もそういう例がちらほらあったという話を聞きました。自分も表現したいという来場者の欲望を引き出しうところが、超老芸術や限界芸術のおもしろいところで、絵画や彫刻だと、勉強しなきゃ、材料そろえなきゃとファーストステップの敷居が高くなってしまいうけれど、限界芸術だったらフットワーク軽く始められる。それが、人と人とのつながりやコミュニティの形成につながっていくんじゃないでしょうか。

作品によって気持ちが引き起こされた人たち

櫛野 超老芸術展に三原英男さんのマグロやカツオの作品がありますが、同じスペースに船の作品があります。あれは実は三原さんの作品ではなく、お亡くなりになった三原さんの実弟がつくった作品で、ご家族がついでに飾ってほしいと置いていかれたものです。

他にも、自作の水槽の中にミニチュアを作る一ツ柳外史春さんの「さくら」という作品のキャプションの裏に「さくら」型に切り抜かれたビールの缶が置かれていました。恐らく自分も表現したい、置いてほしいってことで、バンクシーのような人が置いていったのじゃないかな。

この展示は高齢者の方が主役だと常々思っているのですが、セミナーも当事者不在で進めるのはちょっとおかしいと感じているので、出展作家の本田照男さんにマイクをお渡ししたいと思います。

どうしようもなく描きたいわけです

本田 こんにちは。本田照男と申します。77歳になります。僕のおふくろは日本人ですが、親父が韓国人で、小さい頃に差別を受けました。学校卒業して就職しても、身元調査でクビになっちゃうんですね。結局、沼津市で焼き肉屋を43年やっていたんですけど、60歳のある晩に突然絵に目覚めました。それからずっと絵を描き続けています。大体1日12時間ほど描いており、描きたくて、描きたくて、どうしようもないわけですね。当然、絵は売れませんので、焼き肉屋はつぶれます。女房も逃げます。その後もいろいろ不幸が重なったんですけども描き続けております。

櫛野 バッハのマタイ受難曲が流れてきた時に、手が勝手に動き出して絵を描き始めた取材でお聞きしましたし、焼き肉店の閉店や実弟の他界、奥さんとの離婚、そして在日差別という苦しいことも経験されたともお話をされました。コミュニティに属しているというお話は聞いたことがありませんが、ずっと一人で描き続ける理由は何かあるのでしょうか。

本田 ともかく描きたくてしょうがないわけです。何か描かないと自分の1日が終わったような気がしないし、まるでアルコール中毒になったような感じじゃないでしょうか。

とはいえ、一人で描いていますと、本当にさみしいです。

しゃべる人もいないし、ただラジオから流れてくる落語などを聴きながら描くんです。でも僕の場合は、絵が描けるようになったという喜びで満たされていて、あまり周りに人間は必要ないんですよ。さみしいことはさみしいですけどね。

一番言いたいのは、悲しみだとか、苦しみだとか、苦悩だとか、苦痛だとか、そういう痛目にあって、右か左どっちに行っていかわからない、このままではもう死ぬかもしれないというところまでいけば、絵が生まれるような気がするんです。だって一人しかいないわけだから。その時に絵を描いたことによって、俺は絵が描けるんだって涙が出てきますよね。俺にもこういうことができるんだっていう。そういうことが一番大切に思います。

悲しみにあつたら悲しいけども、とにかく生きて描き続けることが僕は大事だと思います。やっぱり生きてることは奇跡だと僕は思う。不幸が深ければ深いほど、そこから助かれば必ずいいことがあります。僕は体験したことだから言えるんですね。やっぱり覚悟して生きるってことでしょうか。昔は、死にたいとずっと思っていました。でも今は少しでも長く生きて、絵を1日でも長く描き続けたいと思って、今は生きたいとなりました。ありがとうございます。

櫛野 それでは会場のみなさまからも質問を受けたいと思います。

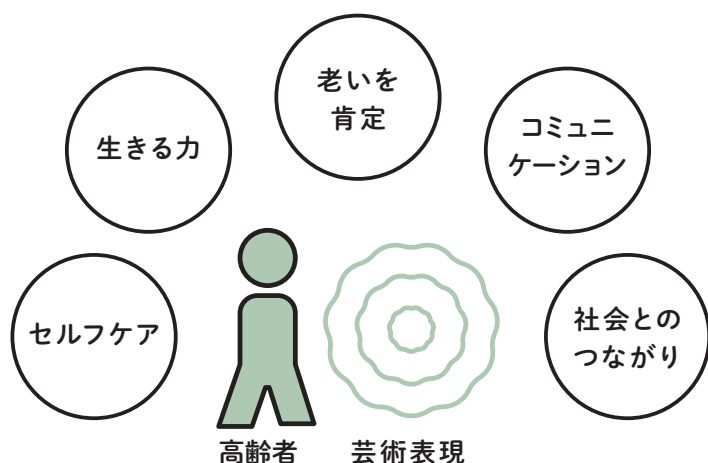
A 今日は素晴らしいお話をありがとうございました。私は高齢者率が49.5%と高い松崎町から参加させていただきました。超老芸術をどうやって広めていくことができるのか、教えていただければと思います。



福住 一番いいのは巡回展だと思います。この超老芸術の展覧会を全国の都市に巡回させて広めていくのがいいのではないのでしょうか。

上田：喫茶店のふりを始めた当初、おじさんが洗濯ばさみでつくった15センチくらいのわけのわからないものを、見てもらいたいからって持ってくるようになったんです。見せられる場所や、持っていったらおもしろがってもらえるみたいな場所が地域の中につくれないでしょうかね。

櫛野 今回は高齢者の芸術表現というものに焦点を当てていますが、アーツカウンシルしずおかは全ての県民が作り手になることを目指しています。社会のさまざまな分野で、住民主体のアートプロジェクトが展開されることによって、アートの力がさまざまな分野の媒介になるよう、様々な取り組みを実践しております。これを持ちまして、セミナー「超老芸術は『文化』だ！一超高齢化社会における文化芸術の可能性一」を終了します。本日は、みなさまどうもありがとうございました。



アーツカウンシルしずおかでは、2024年10月3日から8日の6日間、東アジア文化都市 2023 静岡県専門協働プログラムの一環として、グランシップ6階 展示ギャラリーにて「超老芸術展」を開催しました。また展覧会最終日となる10月8日には、関連セミナー「超老芸術は『文化』だ！—超高齢社会における文化芸術の可能性—」を実施しました。2025年、日本は国民の5人に1人が後期高齢者という超高齢社会をむかえます。このたびの展覧会およびセミナーは、これからむかえる超高齢社会にどのような可能性を示すことができたのでしょうか。

超老芸術展

「超老芸術」とは、高齢になってから、または高齢になってもなお、精力的に表現活動をおこなっている芸術表現を意味する造語で、主に専門的に芸術を学んでこなかった人たちを指して「超老芸術家」と呼んでいます。この造語を作った本展のキュレーター櫛野展正は、知的障害者福祉施設の介護福祉士としてキャリアをスタートさせ、長年にわたりアウトサイダー・アートに関わってきた経験から、高齢者の表現活動取材し、その可能性を探ってきました。

本展では、これまでの取材で発掘した県内の超老芸術家に、全国各地で創作を続ける超老芸術家たちを加えた総勢22組による約1,500点の作品を紹介しました。会場は作品の展示だけでなく、創作の背景にある超老芸術家たちの人生に焦点をあて、表現活動へと駆り立てる原動力を浮き彫りにする構成を試みました。

またセミナーでは、限界芸術を研究する福住廉さん、アール・ブリュットやアウトサイダー・アートのキュレーターとして世界で活躍するエドワード・M・ゴメズさん、日常的に高齢者らと活動を展開している上田暇奈代さんによるプレゼンテーションとディスカッションを実施。一人ひとりがどういった芸術を大切にするのか、なぜ人は芸術を必要とするのか、人生経験が作品にどのように深く結びついているのか。既存の美術だけでなくアール・ブリュットからも周縁化された高齢者の表現活動の可能性について意見が交わされました。

本展において特筆すべきは、会期中に在廊し、作品解説をしながら自身の人生を語る出展作家が非常に多かった点です。6日間の会期中には1,767人が来場し、その半数以上が出展作家たちと同じ65歳以上の高齢者だったことも特徴的でした。これにより、会場は出展作家と来場者、あるいは出展作家同士が出会い、つながる場となりました。また、来場者の大半が、普段は美術館や展覧会に足を運ばない方だったにもかかわらず、「自分も何かやってみたい」という感想を持った人が半数以上にのぼったことが、来場者アンケートで明らかになりました。

超老芸術の特徴

作家の人生が表現活動と深く結びつき、創作の原動力となっている超老芸術には、どのような特徴があるのでしょうか。

—— 喪失と創作

熊本震災を機に自らの人生を見つめ直した田口 Boss さんや、家族との別離や実弟の逝去、店舗の閉店などを経験した本田照男さんは、個人の耐え難い出来事がきっかけになり創作を始めています。また、近藤正勝さんは40代で脳梗塞になって半身麻痺になってから創作を開始し、身体が治ってくると一切作らなくなりました。このように超老芸術家には、慢性的な疾患や障害、喪失体験、貧困、突然の災害といった出来事をきっかけとし、創作によって困難を乗り越え、生きる力を得ている方が数多くいます。

—— 人生をふりかえるセルフケア

高齢者が心身の痛みや喪失を経験し、その延長線上に死を意識することは、これまでの人生を振り返り、残された生をどう生きるかを考えることにつながります。人が亡くなる直前に人生で最高の作品を残すことを、白鳥が死ぬ時に鳴く美しい声に例えて「白鳥の歌現象」(※1)と言うように、「自

分の生きた証を残したい」と創作活動を始める作家が多いことも超老芸術ならではの特徴です。また紙芝居の作品を出展した田中利夫さんや、「満州ポップシリーズ」を描いた林田嶺一さんのように、幼少期の記憶をもとに制作する方も多く、自分の作品の中で過去の出来事や思い出をふり返し、結果的にカウンセリングのようなセルフケアの機会にもなっていると言えます。

—— 孤立が表現活動につながり、表現活動がコミュニケーションを生む

内閣府が発表した『平成 22 年版高齢社会白書』(※2)において、高齢者の社会的孤立を課題視した項目があり、生きがいの低下、消費者被害、犯罪行為、孤独死が問題点として挙げられています。しかし表現活動において孤立は、誰にも邪魔されることなく、自らの価値観に基づいて自由に制作できる賛沢な環境とも言えます。表現活動は孤立を肯定的に捉えることができるだけでなく、地域や家族以外との刺激的なコミュニケーション機会につながっていることが、自発的に在廊し来場者と会話していた方々の姿から見てとれました。

フェルトのマスコットを出展していた浅原きよゑさんは、地域や家族とのコミュニケーション手段として表現活動を行っており、家事や育児を通じて社会とのつながりを深めてきた女性の超老芸術家にはそうしたケースが多いようです。一方、男性については、『平成 23 年版高齢社会白書』(※3)において、男性による社会活動の促進が今後の取組の方向性のひとつに挙げられており、課題視されています。

また、男女ともに心身の不調に対して、人とのつながりを処方するというイギリスでの取り組み(※4)に見られるように、コミュニケーションが健康に及ぼす影響が見直されています。

孤立を避けるために積極的な社会参加が推奨されますが、集団に参加できなかつたり、集団に属さないことを選択したりする方もいる中で、表現活動は孤立の肯定とコミュニケーション機会創出の双方を担保する要素を

*1

ヨーロッパの伝承で、白鳥は死ぬ時に美しい声で鳴くと言われていて、人が亡くなる直前に人生で最高の作品を残すことを「白鳥の歌現象」といいます。

*2

平成 22 年版高齢社会白書
第 1 章 / 第 3 節 3
高齢者の社会的孤立がもたらす問題点
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/gaiyou/22pdf_indexg.html

*3

平成 23 年版高齢社会白書 (概要版)
第 1 章 第 3 節 3
(4) エ 男性による活動の促進
<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/gaiyou/html/s1-3-3.html>

持っていると言えます。

——高齢者の表現を取り巻く状況

表現する喜びに満ち溢れ、見る人を圧倒する超老芸術ですが、福住さんがセミナーで指摘したように日本の美術業界では、新人作家の条件として年齢を40歳未満とする公募展が多く存在し、高齢者による表現活動の発表の場が多いとは言えません。

また既存の美術や文化潮流とは無縁の文脈によって制作された作品を紹介する「アール・ブリュット」の展覧会や公募展にも、高齢者の発表の場は多くありません。アール・ブリュットという言葉は本来、「既存の美術の影響を受けていない人たちによる独学自習の表現」を指しますが、日本では障害者の表現だけを指す言葉として誤認され、高齢者の表現活動は日本のアール・ブリュットの枠組みからも外されています。

高齢者の表現活動

アートとの触れ合いは人生を豊かにするだけでなく、長寿をもたらす効果があるという論文が、2020年にイギリスの研究者によって発表されました。また表現活動は、高齢者本人のみならず、それを支える周囲の人間にとっても高齢者の新しい魅力を発見する機会になっています。そして本人が亡くなった後も作品は遺族にとって故人の生きた証として貴重なものになるでしょう。しかし日本の現状は、認知症の人に対する文化芸術活動の支援であっても、障害者に比べるとごく小規模であり、高齢者の表現活動への支援事例(※5)はまだまだ少ないのが現状です。「老いること」は誰もが避けられないものであるにもかかわらず、高齢者の表現活動がここまで周縁へと押し出されてしまっているのはなぜでしょうか。

「老い」を肯定するための超老芸術

過去において、老境に達することは祝福されることであり、老人は人々から尊敬される存在でしたが、現代では若々しくいることが強く推奨されるようになっていきます。しかし、そのような「理想の老い」を手に入れられなかった人にこそ、現在の自分があるがままに肯定するために、生きる力を呼びさまし、人生に活力を与えてくれるアートの力が必要だと我々は考えます。それは、年弱の我々が表現を通じて老境の視座を享受する多様性のある状況を作り出し、更には医療負担や介護負担の軽減にも通じるのではないのでしょうか。

超老芸術でつくる共生社会

今回の超老芸術展では、高齢者が作品を発表することで社会とつながり新たな活力となり得ることや、他的高齢者にもその活力が伝播することが明らかになりました。この結果は、共生社会を目指す地域づくりにどのように活かされるべきでしょうか。

超老芸術展の開催は、高齢者をより多く幅広い鑑賞者とつなげるための手段であり、超老芸術の真の可能性は、高齢者に光を当て、その人を地域の中に位置付けることにあります。埼玉県では障害者アートを支援する取り組みとして、県をあげて「障害のある方の表現活動調査」を実施し、展覧会や公演を企画しています。超老芸術においても、地域コミュニティや福祉の現場が高齢者の表現を発見する「地域の目」として大きな役割を果たすと考えます。

また、地域コミュニティと美術の専門家が連携し、芸術祭への参加や、超老芸術展の開催を企画することで、高齢者の表現活動を支えると共に、地域づくり等への派生も期待できるのではないかと考えます。

*4

イギリスでは、心身の不調を訴える人に対し、薬ではなく人とのつながりを処方する「社会的処方」という取り組みが広がっています。日本では東京藝大が「文化的処方」という言葉に変えて、アート・福祉・医療・テクノロジーの分野の壁を超えて協働的に研究しつつ、人々の間につながりをつくる文化活動を開発し、社会への実装を試みています。

*5

岡山県奈義町の劇団「老いと演劇」OiBokkeShi(オイ・ボッケ・シ)は、看板役者の「おかじい」こと岡田忠雄さんと、地域に住む認知症のお年寄りや発達障害の若者たちによる演劇公演や、認知症ケアに演劇的手法を取り入れたワークショップを実施しています。

創造 トークス

2023.10.8(日)

に

「高齢者と表現」を考えた

超老芸術は「文化」だ！

～超高齢化社会における文化芸術の可能性～

発行：アーツカウンシルしずおか
(公益財団法人静岡県文化財団)
422-8019 静岡県静岡市駿河区 2- 3- 1
グランシップ1F
TEL：054-204-0059
FAX：054-288-8180
E-MAIL：info@artscouncil-shizuoka.jp
WEB：artscouncil-shizuoka.jp

発行日：2024 年 3 月

編集：アーツカウンシルしずおか

執筆：p.22 ～ p.24 神尾知里

デザイン：桑田亜由子